

現代日本語における漢字の音読み・訓読みについて

— 楔形文字法との比較 —

峯 正 志

はじめに

筆者は以前、楔形文字を用いる言語の表記法と日本語のそれとの比較を行ったことがある^{#1}。それは、日本語の表記法の特質を探るためには表記法の似た言語との比較が重要であると考えたからである。そのための準備として、日本語と、シュメール語、アッカド語の表記法に見られる共通点・相違点を探り、整理してみた。

筆者がそのようなことを行った背景には、様々な一般向けの著作に、楔形文字の表記法についての記述が見られるようになってきたことがある^{#2}。それらの多くは、日本語の表記法に見られる特徴も日本語だけに見られる特殊なものではなく、むしろ普遍的なものであるという文脈の中で、その例証として楔形文字のことを取り上げているのである。

さて、その中で最もよく指摘されるのが、「日本語の音読み・訓読みは珍しいことではあるが、世界的に例のないことではなく、古代メソポタミアで話されていたアッカド語で例がある。」との記述である。その例として、少々長くなるが金田一(1988)^{#3}の記述を引用してみよう。

「日本では「春風」と書いてハルカゼともシュンプウとも読むが、韓国では「チュンフォン」と読んで、これは中国から韓国へ入った読み方だ。「春」という字は、日本でシュンとも読むが、「ハル」という日本語でも読む。……(中略)……この、ハル haru、シュン shun の間には全然共通点がない。このようなことは現在、日本以外にはどこにもない、大変珍しいことである。もっとも今の世界にはほかにないが、歴史をさかのぼってみると、紀元前にはあったという。小アジアで紀元前の昔、シュメル人というすぐれた文化を誇った民族があつて、楔形文字という文字を使っていた。その文字をアッカド帝国というところで借りて自分の国語の表記に使ったのがその例である。

その場合に𐎠^{#4}のように、上の文字はシュメル語で「アン」と言って、「神」という意味だったそうであるが^{#5}、アッカドでは神のことを「イル」と言っていたので、この一つの同じも字を、アンとも読んだし、イルとも読んだりした。アンは日本にあてはめれば〈音読み〉、イルは〈訓読み〉である。……(中略)……これは、日下部丈夫・佐伯功介の書いたものによって述べたが、つまり、日本語で漢字を音読み・訓読みする

のとまったく同じものである。こういったことは、このアッカド語にあったということ以外に筆者は知らない。」

自国語での読み、外国語での読み、という意味での音読み・訓読みがアッカド語にみられることは確かである。従って、上に述べたことは大体において正しいといってよい。しかし、筆者は前述の拙論で、日本語の音読み・訓読みとアッカド語のそれとでは微妙な違いがあることを、短くではあるが指摘した。従って、「日本語で漢字を音読み・訓読みするのとまったく（傍点筆者）同じものである」と主張するのは誤りである。

本稿は、峯（1990）で指摘した点を明確にすることを目的とするが、更にその違いが何に起因するかについても考察し、日本語の音読み・訓読みは単なる表記法の問題ではなく、日本語の造語法に関わる問題であることを指摘したい。

I. 音読み・訓読みの定義

音読み・訓読みとは何か。日本語においては、漢字の持つ読みのうち、中国語の音に基づくものを音読みといい、日本語の音に基づくものを訓読みという。

さて、このような現象をもっと一般的に捉えることも可能である。すなわち、漢字のような表語文字がそれを作り出した民族から他の民族に借用されるような場合、もしその文字を借用した民族が、その文字に自分たちの言語の音を当てはめていけば、日本語におけるのと同様の現象が起きたことになる。そしてその場合の自国語読みを訓読み、元からの読み（すなわち文字を作った民族の言語に基づく読み）を音読みと定義することが出来る。

本稿では、とりあえず「音読み・訓読み」をこのような一般的な定義で用いることにする。「とりあえず」とした理由は、実はこの定義では日本語もアッカド語も全く同じ音読み・訓読みを持つことになり、両者の違いが出てこないからである。従って、この定義は後に修正されることになる。

II. 峯（1990）における指摘

簡単に、峯（1990）でまとめられた日本語とアッカド語の表記法の共通点・相違点をまとめてみよう。

共通点としては、

- 1) 表語文字と表音文字を混用していること。

- 2) 一つの文字が多く読みや意味を持っていること。
- 3) その結果、文字の意味を限定するための送りがないや振りがなおよび漢字の偏に相当する限定符が存在していること。
- 4) 一つの語に複数の表記法が存在すること。
- 5) 音読み、訓読みの区別が存在すること。

相違点としては、

- 1) 一種類の文字体系しか用いていない。
- 2) そのため、同じ文字が表語文字としても表音文字としても用いられている。
- 3) 日本語と同様、分かち書きはしないけれども、(ハムラビ法典では²⁶) 名詞句ごとに改行し、意味を取りやすくしている。
- 4) 日本語のように縦書きでも横書きでもよいというのではなく、横書きである。
- 5) 日本語と同様「音読み・訓読み」があるといっても、微妙な違いがある。

といった点を挙げた。

これらの中で本稿に関係するのは、共通点の(5)と相違点の(5)である。ここで主張されていることは、確かにアッカド語にも日本語と同じような音読み・訓読みが見られるが、両者の「音読み・訓読み」は全く同じものではない、という点であった。

具体的に見てみよう。

ha-am-mu-ra-pi² LUGAL da-num² LUGAL KA².DINGIR.RA^{ki} LUGAL ki-
ibra-tim ar-ba-im

Hammurapi šarrum dannum šar bābilim šar kibrātīm arba'im

ハムラビ(人名) 王 強き 王 バビロンの 王 世界 四

「ハムラビ、強き王、バビロンの王、四方世界の王」

楔形文字の転写法にはいくつか決まり事があり、表語文字は大文字で転写されることになっている。例えば、LUGALは「王」を表す表語文字である²⁷。一方、表音文字は小文字で書かれることになっている。da-num²は、daと読まれる音節文字とnumと読まれる音節文字から成っており、daとnumでdannumという形容詞を表している。ハイフンはこの二つの文字が一緒になって一語を表すことを示す。このことを頭に入れてこの文を見ると、大文字で書かれたものが漢字、小文字で書かれたものがかなに相当することが分かるであろう²⁸。日本語で書くと、「ハムラビ、つよき王、神門(バビロン)の王、しほうせかいの王」とでもなろうか。

さて、上で述べたように、楔形文字の場合はただ一種類の文字体系を表語文字、表音

文字それぞれに使っている。そこで、音読み・訓読みの有無もそれぞれの場合について見ていく必要がある。

まず、表音文字としての楔形文字の場合はどうであろうか。初期のアッカド語では、殆どの場合、シュメール語の音に基づく表音文字を使っていた。上で挙げたアッカド語の例文で見られる表音文字はすべてシュメール語の音に基づくものである。時代が下がるにつれて、次第にアッカド語の音に基づく表音文字が用いられてくるようになる。例えば上で「強い」*dannum* を *da-num* と表記しているが、*dan-num* という表記も見られる。*da,num* はシュメール語に基づく読みだが、*dan* はアッカド語に基づく読みである。

従って、確かに表音文字としての楔形文字には音読み・訓読みがある。

ここまでの記述でアッカド語の表記法が日本のある特殊な表記法に酷似していることが分かるであろう。すなわち、一種類の文字体系を表語文字にも表音文字にも用いているという点で、まさに万葉仮名と類似した体系なのである。そしてその表音文字における音価にシュメール語系のものとアッカド語系のものの二種類が混在するということは、すなわち万葉仮名における音仮名、訓仮名と同様なものが存在するということである。

では、表語文字としての楔形文字を使った場合、果たしてシュメール語音で読んでいた（音読み）ののだろうか、それとも、アッカド語音で読んでいた（訓読み）ののだろうか。実は、これを訓で読んでいた証拠がある。すなわち、アッカド語読みを示す「送りがな」がみられることである。もともと送りがな⁹は、日本語と同様、いくつかの読みが考えられる楔形文字に対してその読みを決定する手がかりとして用いられ始めたものである。その送りがなをみると、アッカド語で読まれていたことが分かるのである。例えば、*DAM-at* とか *DAM-su* といった表記がある。*dam* はシュメール語で「配偶者」の意味だが、*-at* があることによって、これはアッカド語の *aššat* (*aššatu* 「妻」の *status constructus* 形)として読まれていることが分かる。また、*DAM-su* の場合は *aššassu* (**aššatšu* 「彼の妻」)であることが分かるのである。

このように表語文字の場合はアッカド語で読まれるので、日本語と同様の訓読みは確かにある。では、音読みはどうだろうか。

「鋤」のことをシュメール語で *apin* という。これはアッカド語に借用語として取り入れられ *epinnu* となった。そして、*giš.APIN* と表語文字で書かれた場合¹⁰、アッカド語では *epinnu* と読んだ。この場合、外国語の音で読んでいたため、これは音読みといってよい。そういう意味ではアッカド語にも音読みは存在するのである。しかしこのような音読みは、日本語に見られる音読みと全く同じものなのであろうか。

別な例を挙げると、「宮殿」はシュメール語で *e2-gal* という。*e2* が「家」、*gal* が「大

きい」という形態素であり、E2 という表語文字と、GAL という表語文字で表記する。アッカド語はこれを、ekallu という語形で借用語として取り入れた。従って、E2.GAL をアッカド語では ekallu と読む。しかし、この場合、E2.GAL という表語文字をシュメール語の音に基づく読みで読んでいるからといって、日本語におけるような音読みと考えるとよいのだろうか。

次のように問いを変えてみよう。すなわち、アッカド人は、日本人が漢語を読むように、果たして E2 という表語文字と、GAL という表語文字をそれぞれ e および kallu と読み、分析して「宮殿」として理解していたのだろうか、ということである。おそらくそうではなく、ekallu は e2-gal を一語として借用していると思われる。従って、E2.GAL 自体も分析せずに一語として捉え、それを全体として読んだと思われる。つまり、ekallu 「宮殿」という形態素があるのであって、「家」という意味での e とか、「大きい」という意味での kallu という形態素があるのではないということである。日本語の場合、漢字の音読み・訓読みというのは意味と結びついているわけで、形態素のことである。「宮殿」を日本語の場合で考えてみると、私たちの意識の中では（通常はあまり意識しないとしても）それが「きゅう」と「でん」の二つの音からなり、それぞれがある意味と結びついていることが分かる。日本語では音読みといっても単に音を表すだけのものではないのである。ということは、全く日本語と同じ意味での音読みはアッカド語には見られないことになる。

つまり、日本語の場合、同じ漢字が音読み・訓読みをともにもち、さらにそれぞれが意味と結びついているということである。epinnu 「鋤」の例では、この文字は音読みだけを持ち、同じ意味を持つ訓読みが存在しない。ekallu の例でも、音読みだけがあり、訓読みが存在しない。この例の場合には更に、この形態素は二つの表語文字で表記されているにも関わらず、それぞれ音と意味を担っているわけではなく、ekallu という一つの形態素を表すために用いられているのである²¹¹。

以上、アッカド語の「音読み・訓読み」が日本語のそれとどのように異なるか見てきた。なぜこのような微妙な違いが存在することをことさら言わなければならないのかという、前に引用した金田一(1988)などの記述では、全く日本語での用い方と同じであると受け取られてしまうからである。またおそらく金田一も全く同様なものであると理解しているのであろう。それは、たんに「全く同じものである」という書き方をしているからというわけではない。先ほどの引用に先立つ部分で、そのような理解をしていると思われる記述があるからである。

「ところが、このあたりはまだ序の口で、もっと難しい問題がある。日本では、漢

字を中国式に読むほかに、日本語式に読むことだ。これは、日本人が古くから日本語を単語の意味を表す漢字で表記したことから起こるもので（傍点筆者）、そのために、たとえば「間」という字は、ケンとかカンとか読むのは中国式だが、アイダともマとも読む。相手（あいて）、合間（あいま）、逢（あ）う……。こういう言葉は全部、日本語という外国語で漢字を読んでいるのだ。」

この記述は、表語文字としての漢字が音読み・訓読みを持つということを述べたものである。金田一のこのような記述は、後述する「ヤヌスの二重性」をアッカド語の表記法も持っているという認識に基づいていると思われる。しかし、アッカド語の表記法にはこの「ヤヌスの二重性」は見られないのである。そして、このことが日本語の音読み・訓読みを非常に特殊なものにしているのである。

Ⅲ. 日本語の「ヤヌスの二重性」

ここで、「ヤヌスの二重性」についてすこし述べなければならないだろう。というのは、日本語の持つ音読み・訓読みの独自性というのは筆者にはこのこと存在であると思われるからである。

鈴木（1975）によると、日本語では、音読みと訓読みが漢字を媒体として頭の中で結びついているという。

「私たち日本人がある漢字の音と訓を知っているということは、とりもなおさずその漢字で示される概念の、二つの別の言語における音的实现体^{#12}が、同一の文字表記をつなぎとして頭の中で癒着していることにはかならない^{#13}。」

鈴木はこれを「ヤヌスの二重性（Janus duality）と呼んでいる。鈴木の出している例を用いると、「水」という概念は「すい」と「みず」という二つの音的实现体が「水」という文字表記を媒体として頭で結びついているというのである。

アッカド語にはそれが無い。アッカド語の場合には、文字に意味が結びついている場合には音読みか訓読みのいずれかしかなく、また音読みと訓読みの二通り（以上）の読みが結びついている場合には、意味が介在していない（表音文字として使われているため）。

ここで重要なことは、「漢字には音読み・訓読みがある」という言い方は正確ではないということだ。日本語に漢字の音読み・訓読みがあるということは、漢字が、同じ概念

を持つ漢語系形態素と日本語本来の形態素の二つをとともに表記しうると言うことであり、言い換えれば、日本語は二種類の系列の形態素をとともに持っていると言うことである。たんに漢字が二つの読み方を持っているというようなことでなく、日本語には二系列の造語法があるということを表しているのである。すなわち、音読み・訓読みの問題は単なる表記の問題でなく造語法の問題なのである。

IV. 「ヤヌス的二重性」の発達の理由

では、なぜ日本語では「ヤヌス的二重性」が発達したのか。私は日本語史の方面からそのような発達の起こった直接の理由を考察できる立場にないが、アッカド語でそのような発達がなかったのはなぜかという点から推測すると、次のような理由によるのではないかと考える。

一つには、漢語系借用語の量の多さによるのではなかろうか。日本語の場合には、非常にたくさんの漢語系語彙が日本語に入った。そのため、漢語系形態素が日本語の語彙の中で無視できないほど非常に重要な位置を占めるに至った^{#14}。例えば、「学校」と「学生」だけが、「がっこう」、「がくせい」として日本語に取り入れられたとしても、最初の部分が同じ形態素であるという意識は生じないであろう。そのためにはもっと多くの「学」を用いた漢語が必要だったと思われるが、日本語には実際その様な状況が生じたのである。

二つめには、それらが漢語系語彙として、もともとの日本語の語彙と共存してしまったということもあろう^{#15}。漢語系語彙が全く日本語本来の語彙を駆逐してしまってもそもそも訓読みの方が成立しなくなる。

アッカド語の場合には、シュメール語の語彙はもちろん借用されているが、おびただしくはいったわけではない。また、借用があった場合、シュメール語系の語彙とアッカド語系の語彙とが共存せずに、シュメール語系の語彙だけが取り入れられることになった。そのため、日本語とは異なった発達を遂げるに至ったように思われる。

また、当然のことながら、人々の中にそのような文字による音形の癒着ができるためには多くの人々が文字を知っていることが前提となる。アッカド語でその様な発達がなかった理由の一つとして、近代の日本のように識字率が高かったわけではないことも挙げられると思う。言うまでもないことだが、古代メソポタミア（に限らずいずれの地域においても古代）では、文字が多くの人に知られていたわけではないのである。書記という特別な職業の人間だけが持っていた技能であったのである。

ところで、文字がなくても、二つ以上の形態素が同じ様な概念を持っていれば、頭の

中で癒着しないのだろうか。鈴木(1975)が例に挙げているが、英語語彙の中にも hydro-, aqua-, water のように異なった形態素がある。しかし鈴木によれば、英語話者の頭の中では、たとえ hydrogen や hydrophobia のような語を知っていても、hydro-, aqua-, water の三つの形態素が〈WATER〉という意味で結びついているとは限らないとのことである。鈴木(1975) p.85.には、

「ことばの構成要素が外来のもの、(ほとんどがラテン語かギリシャ語)である場合には、高等な教育を受けた人でない限り、その意味を適確に指摘することができないのが普通である。」

とある。やはり文字の支えがなければ、たとえ多くの外来語形態素があったとしても癒着は起きにくいのであろう。

日本語の場合においても、漢字が民衆に行き渡っていない時代においては、漢語は民衆にとって英語に於けるラテン語・ギリシャ語系語彙のようなものであったのではなかろうか。

このように考えると、日本語に於ける「ヤヌス的二重性」というのは、大量の漢語系語彙の存在、およびそれらの日本語語彙との共存、そして識字率の高さに支えられているように思われる。従って、このような現象が日本語に現れたのは、比較的最近なのではなかろうか。

V. まとめ

筆者の結論としては、日本語の音読み・訓読みの独自性は、鈴木の言う「ヤヌス的二重性」の存在にあるということである。たんに「文字に外国語読み・自国語読みの二つの読み方がある」という、第2章での仮の定義では、本稿で述べたようにアッカド語にも見られるので、日本語に見られる現象は独特のものであるとは言えなくなる。というより山田(1987)のいうように「普遍的」なものである可能性もある。しかし、音読み・訓読みを「ヤヌス的二重性」を持つような外国語読み・自国語読みである、というように定義を修正すると、アッカド語はもはや音読み・訓読みを持つとは言えなくなる。その意味で、現代日本語の持つ音読み・訓読みというのはかなり特殊な言語現象といえるのではないかと思われる。

ここで、一つ気付いた点を指摘しておきたい。それは、表語文字が借用された場合、音読みと訓読みではどちらがより発達しやすいのかという点である。借用された文字に

はそれを元々用いていた民族の言葉の音が常に結びついている。そのため音読みの方が発達しやすいと思われるのではなかろうか。日本語で訓読みが発達したことを特筆する傾向があるのもそれを物語っているようである^{#16}。しかし、アッカド語でも表語文字は訓読みされていることから分かるように、表語文字を意味を表す文字として用いた場合は訓読みするのがむしろ普通なのではあるまいか。万葉仮名やアッカド語に見られるように、表語文字を表音文字として取り入れる場合には確かに音読みの方が圧倒的に用いられるようであるが、こと意味を表す文字として用いる場合には、自国語を書き表そうとする限り、自国で普通に使われる語を表すために使うのであるから、訓読みするのがむしろ当然のように思われる。


ある民族が(表音的でなく)表語的な文字を別の民族から借用した場合、日本語と同様な音読み・訓読みが生じるかという点については、「そうなるかも知れないし、そうならないかも知れない。」としか言いようがない。事実、同じ漢字を導入した朝鮮やベトナムでは、訓読みは発達しなかった。また、本稿で指摘したように、古代メソポタミアのアッシリア人・バビロニア人は、他民族から文字を借用し、現代日本語における音読み・訓読みと似てはいるが異なった体系を発達させた。

歴史に「もし」は許されないが、シュメール語がもしアッカド語に非常に多量の借用語を提供していたら、そしてアッカド人の多くが文字を知るような状況にあったら、果たして楔形文字は日本語における漢字と同じような発達をしたであろうか。

古代メソポタミアの例から言えることは、外来の表語文字を自国語で読んだという点に関しては、日本語だけがそのようなことを行ったわけではないが、その発達に関しては日本語独自のものであるということであろう。

引用文献

- 金田一春彦 (1988) 『日本語 新版(下)』岩波新書 岩波書店 東京
 日下部文夫 (1981) 「文字の本質」西田 (1981) 所収
 鈴木孝夫 (1975) 『閉ざされた言語・日本語の世界』新潮選書 新潮社 東京
 西田龍雄編 (1981) 『講座言語第5巻 世界の文字』大修館書店 東京
 橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇 (1987) 『漢字民族の決断 漢字の未来にむけて』大修館書店 東京
 峯 正志 (1989) 「楔形文字と漢字かな混り文 — シュメール語と日本語の表記法について —」『広島大学留学生日本語教育』第2号 p. 44-53 広島
 ——— (1990) 「楔形文字と漢字かな混り文(2) — アッカド語と日本語の表記法について —」『広島大学留学生日本語教育』第3号 p. 47-56 広島
 山田尚勇 (1987) 「技術革新と日本語のゆくえ — 何がことばを創るか」橋本・鈴木・山田 (1987) 所収
 山本七平 1989. 『日本人とは何か(上)』PHP研究所 東京

- 注1 峯 (1989) および峯 (1990)。
- 注2 例えば、日下部 (1981) P. 61 ff.、山田 (1987) p. 370 ff.、金田一 (1988) p. 29 ff.、山本 (1989) p. 73 ff. 等参照。
- 注3 金田一 (1988) p. 28 ff.
- 注4  という記号の載った図を指す。
- 注5 この記述は誤りで、シュメール語では「神」は dingir という。但し、この文字はシュメール語で dingir とanとも読むことが出来る。「神」の意味の時は dingir と読み、「天」の意味の時は an と読む。なお、金田一の記述に限らず、楔形文字についての記述は一般に他の文献の引用から成り立っているため、やむを得ないこととはいえ、語義や語形の誤りがかなり見られる。
- 注6 峯 (1990) では、アッカド語と言ってもハムラビ法典の表記法を中心に議論している。同時代の他の文書も含め、一般にアッカド語ではシュメール語のように頻繁に改行しない。
- 注7 表語文字はシュメール語音で転写することになっているが、必ずしもシュメール語音で読まれたとは限らない。アッカド語では、借用語でなければ後述するようにアッカド語で読まれる。
- 注8 上付きで示された ki は、その前に来る名詞が地名であることを示す限定符 (determinative) と呼ばれる要素である。単なる表記上の記号で、発音はされない。
- 注9 アッシリア学では phonetic complement と呼び慣わされている。例えば、シュメール語においては、DU と書かれる文字は du, gin, tum2, gub 等、様々な読み方を持っている。これに -a という接尾辞が付いた場合、単に DU-a と書き表すと、上のどの読みを採用すべきかわかりにくいので (文脈から分からない場合も多い)、DU-na (= gin-na) ,DU-ma (tum2-ma) ,DU-ba (= gub-ba) と書き表すことが普通となっている。-na が書かれていれば、前の文字の語末音が -n であることが分かるというわけである。日本語の送りがなと同様の現象であることが分かる。
- 注10 giš は、木を表す限定符である。APIN は apin と読めば「鋤」の意味だが、engar と読めば「農夫」の意味になる。「鋤」の意味を表したいときは、この限定符をつけて engar と読まれないようにしたわけである。漢字でいえば木偏に相当する。
- 注11 日本語のような表語文字の使い方をアッカド語が持っていないということであって、アッカド語のような表語文字を日本語が持っていないということではない。例えば、「鋤」の例は、日本語では「肉 (にく)」がそれに相当するであろう。また、「宮殿」の例は、「煙草 (タバコ)」が全く同じとは言えないまでも、近い例ではなかろうか。
- 注12 「二つの別の言語における音的实现体」というのは、表現としてよくないのではないか。音読み・訓読みはどちらもあくまで日本語の「音的实现体」であるからである。たとえ中国語の音ももとなったとしても、音読みはあくまで日本語の (漢語系) 形態素を表すものである。
- 注13 鈴木 (1975) p. 83.
- 注14 橋本・鈴木・山田 (1987) p. 289には、あまり中国語の語音が日本語の語彙の中に入り込んでしまっていて、語構成上漢字語根に伴う構成法の要素を日本語の中から捨てることが出来ないほどであることが述べられている。そのため漢字は日本語の中で想像以上に長く生命を保つのではないかという。
- 注15 もちろん、「水」の「みず」と「すい」に見られるように、日本語本来の語彙は独立形態素であり、漢語系形態素の場合は拘束形態素であるという違いはあるが。
- 注16 例えば、金田一 (1988) p. 28に「訓読みの特殊性」という見出しが出ている。

On the co-use of on-yomi and kun-yomi of Modern Japanese Kanjis

— In comparison with Akkadian Cuneiform Writing System —

Masashi MINE

ABSTRACT The view that the Japanese writing system is unique and its characteristics are not to be found in any other languages in the world is losing grounds these days through the increasing knowledge of ancient Mesopotamian languages such as Akkadian. The co-use of “on-yomi” (the Sino-Japanese reading) and “kun-yomi” (the Japanese reading) for Kanjis (Chinese characters) is one of those characteristics and it is now sometimes claimed to be just a common (or even “universal”) phenomenon when “logograms” are used by people of a different language because the Akkadian writing system had “exactly” the same development.

With a closer look at the Akkadian writing system, however, we notice that the actual use of kun-yomi, native reading, and on-yomi, foreign reading, in these two systems are not exactly the same. The present author points out that the difference comes from the absence of what Suzuki (1975) calls “Janus duality” in the Akkadian system. The Janus duality refers to a characteristic of Modern Japanese Kanjis to assign a dual reading to Kanjis.

According to Suzuki, Kanji ties on-yomi and kun-yomi through its meaning. For example, /sui/and/mizu/ are tied through the meaning <WATER> (水). The Akkadian cuneiform signs, however, doesn’t have this feature. Many of them have both “on-yomi” (from Sumerian) and “kun-yomi” (from Akkadian) when used as “phonograms”, but when used as “logogram” they have either on-yomi or kun-yomi. Therefore, it is not correct to say that both systems are “exactly” the same.

The present author further points out that this difference comes from the characteristics of the Japanese lexicon, namely the co-use of the two series (the Sino-Japanese and the Japanese) of morphemes which share the same meaning. This characteristic enabled the Janus duality to arise in the Japanese writing system. The phenomenon of Janus duality is not only a phenomenon of Kanji use, but also a phenomenon which is closely related to the characteristics of the Japanese lexicon itself.